

文章を読むとき、「知ってほしいこと」や「書かなくてはいけないこと」を、読みながら「読みの観点」です。特に、**人物の気持ちや性格**を「読む」ことも役立ちます。今回、4つの紹介します。

☆観点①



気持ちがそのまま言葉で書かれます。登場人物が、どのような気持ちなのか、すぐに読みとることができるようでしょう。

(例)

- ・うれしい
- ・悲しい
- ・やみしい
- ・ひどい
- ・楽しい
- など

☆観点②



気持ちを言わなくても(書かなくても)、読みとることができます。

(例)

先生は、教室のドアを勢いよく開け、ズカズカと入ってきました。そして、教科書をたたきつけるようにおき、「口直、命令ー」とぶっきらぼうに言いました。

このときの先生の気持ちは？

☆観点③



それぞれがもっているイメージから、気持ちを想像します。場面によって使われる色が、大きく変わることもあります。そこは、**気持ちの変化**を読むチャンスです。

(例)

- ・その男の人は、いつも黒色の服をきています。
- ・にじ色のゼリーのようなくらげ。
- ・もも色のやしの木みたくないそぎんちゃく。(「スイミー」より)



☆観点④



その場面の登場人物の気持ちを表したり、これから起こることを前もって読み手に予想させたりします。

(例)

- ・友達と大げんかをした後は、どしゃぶりの雨の中を一人、帰りました。
- ・発表会の日の朝は、曇一つない、晴れわたったよい天気でした。



では、「読みの観点」を使ってみましょう。「あっこれ、読みの観点だ！」とわかったところには、いつも線を引きましょう。後から見直すときは「楽」になりますよ。

今日は、楽しい遠足の日。朝起きると太陽が オレンジ色にキラキラと かがやいて見えました。わたしは お気に入りの ピンクの服に着がえ、お母さんに元気よく

「行ってきます！」



と言って、家からとび出しました。学校までの道は、スキップをして行きました。

☆ わたしの気持ちはどう？

なぜ、そうわかる？ (さくし書いても いいよ)

今日は、つまらない遠足の日。朝からどんよりもっていて、空が灰色の雲でおおわれている。まるで、わたしの心みたい。いつもの黒色の服に着がえ、お母さんに小さな声で、

「行ってきます。」

と言って、家を出た。学校までの道は、とぼとぼ歩いた。



☆ わたしの気持ちはどう？

なぜ、そうわかる？ (さくし書いても いいよ)